



中村俊定文庫  
文庫 18  
931







麦喰一馬を心と別しが  
 帯かけて下女が侍なり梅  
 穂持ぬなほゆきを削り雪か  
 起しの心動てり髪はな多  
 口わいて初雪を待たぬ密儀  
 名月おぼえてれ上流人の記



野水 青垂 正秀 仙化 露川 其角

著るるを去年　のほのたがし  
かゝるるがぬるるまゝ　の柳よ  
さか　し　ふ　の　月　の　あ　ま　り  
は　は　は　の　た　は　は　は　の　た　は　は  
滝　の　新　く　も　も　も　も　も　も　も  
梅　も　も　も　も　も　も　も　も　も　も  
夏　も　も　も　も　も　も　も　も　も　も  
漢　之　傘　下　探　水　塊　人　荷　兮　傘　下　洗　古

此　を　い　ふ　傘　を　か　り　村　内　雨  
雨　を　い　ふ　い　ふ　い　ふ　降　は　は　は  
花　の　山　の　柳　も　も　も　も　も　も　も  
さ　か　り　の　羽　も　も　も　も　も　も　も  
糸　の　の　の　の　の　の　の　の　の　の  
さ　か　り　の　の　の　の　の　の　の　の　の  
さ　か　り　の　の　の　の　の　の　の　の　の  
さ　か　り　の　の　の　の　の　の　の　の　の  
林　陰　加　賀　文　毛　直　江　津　巴　分　甚　居　寺　米　末　辰　之　助　玉　盾　傘　下　今

空のつらきうらみは初夢  
蓮池は清くしてすき  
うらみはさし人かきかて是れ  
短くもさる春もまじと後と  
八月雨の波もあはれは  
獨吟のうらみは道一昔田  
大月雨はくさくさあはれ

昨非 名屋  
峯雲  
許六  
浪東 鳴海  
知足  
石人  
竹風

雨のあはれは遠く  
大よみ人かきかては  
給ふこと何れは雨の  
浦のうらみは遠く  
ちよきうらみは遠く  
うらみは遠くは遠く  
もくこと何れは遠く

全  
貫化  
支考  
石人 美濃  
正勝 難波  
三惟  
許丹

筆・世とわたりしよき  
煉掃の鼻の下にほ一文  
記さぬふも河馬の尻尾馬  
年一市平一枚の田心あふ  
し食の尻しらしとなすは  
六のれしあふもわらうと  
まゝ食の動ぬれれれあふ

石人 朱迪 貫心 曾呂 許六 丹頂十 龍丸

日盛のつらう合てり  
はるして角の遠ま涼  
枝なり雀あし雪れ  
袖すうて樟よ近も柳  
客よは船の餘情はよ  
長年水さ年長色は  
道とせよよひし

且水五 子韵 吟朔 松木 竹也 龍丸 文道

定し事申梅子ついで白の意  
草の烟も色をば春さ  
舟も舟の帆もは風をば  
陰は那れをさす柳  
雲白し杭の川の 鶴鷄  
ふとれは我をさす 古用子  
そ浪や月波襲積る衣川

探芝 一晶 自支 仅水 我誰 風和

三々々々生虫にうらむ  
木枯よもれをのほろ何れ  
ふさふささる衣を年れ音  
わさる 指も花もをば  
雲れもをさす 白雲をさす 月影  
ゆらゆら鳥のちあをさす 可る  
葉も実も花もをさす ちり

如此 露伴 調氏 倫隨 免嘯 雲溪 格堂

咲ぬより始をすねらむ

岸珠

村雨ののびさ 陸の陽

鳥角

浜のまをる / かのまをすおぼ

調尋

園をぬきおぼらけり / 夕の

我誰

心あやふまをぬき / 夕の

一〇

一目の月 / 夕の

厨志

雲の / 夕の

調尋

云 / 夕の

蝶光

腹 / 夕の

湖東

蝶 / 夕の

杜里

昔 / 夕の

傘下

雨 / 夕の

釣眼

山 / 夕の

秋冬

二 / 夕の

傘下



春雨やそをこし山へて遠三里  
まればと何かな思ふ夜の雲  
蚊かきけしすけし酒の志あり  
蚊もあかしく出ぬすまふ  
うららけや柳の心はけり  
うららけや眠らぬこと月れ細  
うららけや鶴の心はけり  
雨

積能  
雲海  
可智  
雲海  
峭壁  
松松  
今

有相れ流るる心も  
あまのこもれかたし  
何とぞしものまき蛙が  
楊梅乃峰のまき蛙が  
しる花乃日南のまき蛙が  
るる花乃日南のまき蛙が  
種なるまき蛙の心

峭壁  
可智  
冷谷  
正延  
雲紅  
純電  
泥身

海鳥の舟 鶴の舟 舟の舟  
花の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟

舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟  
舟の舟 舟の舟 舟の舟

名計  
一ト  
消壁  
梅仁  
舟休  
指松  
舟草

舟草  
茶瓢  
鶴色  
晴虹  
傘下  
湖舟  
長鼓

木乃山也や首がくしと名ふ  
 五穀海一海はくしと名ふ骨  
 がはくしと名ふ海はくしと名ふ  
 山をくしと名ふ海はくしと名ふ  
 山をくしと名ふ海はくしと名ふ  
 山をくしと名ふ海はくしと名ふ  
 山をくしと名ふ海はくしと名ふ  
 山をくしと名ふ海はくしと名ふ

柳里

板拵

朗凡

擗之

玉屑

晴虹

傘下

大雲や船はくしと名ふ食はくし  
 鶴はくしと名ふ斬はくしと名ふ  
 行人はくしと名ふあしと名ふ  
 酔はくしと名ふあしと名ふ  
 風はくしと名ふあしと名ふ  
 七致はくしと名ふあしと名ふ  
 文幹はくしと名ふあしと名ふ

柳里

年志

新水

定方

志水

東島

文幹

扇峯  
 雲芝  
 蘭芳  
 山店  
 在慈  
 之途  
 山店  
 自其根許  
 酢之  
 以唐之  
 猶乃食之  
 固也  
 岩壁  
 以青  
 扇峯

小葉の  
 さかき

者  
 御音

其角  
 扇峯  
 史邦  
 乙品  
 史邦

近道やよれまじふる盆  
行馬れまよふまじふる宿しゆく  
まよふまよふまよふまよふ  
嘆ふに枕の中よるに梅

洞木 翁 今 今

旅行

内庭は月をけけまよふ白  
半の厚敷ぬきたる秋風

寒 翁

尻をかよふまよふまよふ  
深梅をけけまよふまよふ  
燈成経て世まよふまよふ  
煉瓦の目窓ありし墨すみ所  
初雪をよふまよふまよふ  
今衣下は羅漢あてまよふ  
皆まよふまよふまよふ

風腫 犬草 公羽 怒風 八角 <sup>肥塔</sup> 和石 <sup>日所</sup> 東習

芭蕉を尋ねてのふとせむし増年  
ふらふらとけの垣ののちかきさ  
まらふしすやもや案の子の勝年  
晴れやとふ乃は方有年れえ  
一日漸るま勝の事母の白いじ  
空鳥のたのむのそや志のそ  
空鳥のたのむのそや志のそ

信列 和清

似鴉

史英

探丸

高門 嘯風

加賀 十丈

初の夜

入相の雛やハ鴻の破  
儒者らとらういんはうもる  
背のけなを膳ますらうて雛  
ふらふらとけの垣ののちかき  
れがけの海にさるる涼  
判鱗れがけの浦に蓮れ上  
旅駕は巻れらうと一宿をまわら

許六

鳥紅

伊勢 文色

山 空芽

美濃 乙孝

百木 猿之

初来

君月如雲... 鷄乃... 泊... 枯... 煉... 七... 升...

陸夜 過 隋 許 陸 越 凡

好... 全... 去... 芭... 本... 其... 昔...

翁 全 家 路 蟬 溪 一

得字入 定心也 一初 二良 三  
春 凡 三 十 十 十 十 十 十 十  
物 事 成 成 成 成 成 成 成 成  
何 事 事 相 成 成 成 成 成 成

路通 伊賀 子 露川 同 通 同 都柳 露舟 同 推之

西窓 九 八 七 六 五 四 三 二 一  
道 道 道 道 道 道 道 道 道  
七 六 五 四 三 二 一 零  
主 主 主 主 主 主 主 主 主  
サ 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞  
し しま しま しま しま しま しま しま しま

巴都 如山 兼吟 凡春 東推 六園 露舟



朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女

岩照  
冬梅  
ト  
家法  
春山  
翠之  
瓊雲

朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女  
朝顔の花をくよけふ女

青  
未學  
深谷  
一乳  
非空  
信列  
夕川

涼しき水に魚が泳ぐ 鯉の浮沈  
 魚の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ  
 桜の枝を折る 舟の浮沈  
 舟の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ  
 舟の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ

舟の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ  
 舟の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ  
 舟の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ  
 舟の二つ首のたがひ 鴨の  
 夕暮の涼しき水に魚が泳ぐ

列島

紋

水

村柳

又

路

毛

白糸

花

虹

雷

滝

辰

鹿

花をたはしき遊子桂が  
 月もあかればはのあま  
 花のたはしき遊子の桂が  
 名根跡も遠くはしき余里  
 百古啼せ入るの女もあ  
 桂山谷の亭の留るなる花  
 橋は香もたはしき遊子の桂が

尾山  
 深谷  
 若菜  
 一品  
 凡兆  
 其角  
 宗長

雲はたはしき遊子の桂が  
 祇園

素仙

一七四 春の雨  
 玄旨

中古茶臼之辨

春の雨  
 梅盆  
 宗園  
 貞恕

おのれしや折るしらぬか  
よのちのりさの浦とちを  
うまのれちよ生家すはれ  
まを家くあつて

湖春  
常牧  
眺山

今も母をいじりしやみ峰  
常もいれ古をふたを物  
戸敷て用をたると有知が

日葉  
荷言  
一笑

秋酒をいじりしやみ峰  
たにちび切舞の母家  
まを家物に花より長  
うまをいじりしやみ峰  
まをいじりしやみ峰  
三井寺のれちよ生家  
軒合の猫とてうまをいじりしやみ峰

秋風  
木因  
心差  
原水  
風山  
公羽  
其角

くさもれ流きつなうし麦れ山 野水

詞のまらわいぬし句

河江楠れま下や見づりまうに 九兆

乃摩もころのれ水桐れ也 野水

空居少く

月そしころこはましし海あふは 風軒

まごうよーたごーろいそ事櫻 皆醉

未乃吉公朝鮮入之時

のしころ屋しそれいそまう

こまめし水塔のそれを屋を  
そしそれれれまうしそれしそ  
あせあせあせあせあせあせあせ  
それれあせあせあせあせあせ  
あせあせあせあせあせあせあせ

かにれすし流きつなうし麦れ山 公羽

くさもれ流きつなうし麦れ山 如川

花は春  
 真則  
 蘭秀  
 卓志  
 来山  
 乙列  
 翁

花は春  
 真則  
 蘭秀  
 卓志  
 来山  
 乙列  
 翁

芭蕉

行德  
 路通  
 晨嵐  
 友五  
 棄下  
 越人  
 落梧

一雲  
 文麟  
 棄下  
 野山  
 胡友  
 其用

草花に雲をふくむ所と  
雲をふくむ所をいふ道が  
まじりていふ道なるを  
せんや七の字の道なる  
まじりていふ道なるを

如く

七の字の道なるをいふ道が

公利 息仙 隆行 路通 真室 倭仙

本意ありてあるは野中が  
わけはの道なるをいふ道が  
境の道なるをいふ道が  
敷設く時鳥はは無様なる  
土橋の道なるをいふ道が  
川舟の道なるをいふ道が  
河舟の道なるをいふ道が

一髪 一桐 荷竿 上杖 塙車 冬文 越之



の心は思はれぬるれは  
たれぬれは思はれぬるれは  
山は思はれぬるれは  
宿は思はれぬるれは  
花は思はれぬるれは  
舟は思はれぬるれは  
温は思はれぬるれは

授也 集下 木尊 文鳥 柘治 温故 萬泉

は思はれぬるれは  
舟は思はれぬるれは  
温は思はれぬるれは  
花は思はれぬるれは  
宿は思はれぬるれは  
山は思はれぬるれは  
たれぬれは思はれぬるれは  
の心は思はれぬるれは

野矢 一橋 落枝 集下 玄寮 落柘 李桃

川等れり屋なひるほはぶ

一髪

深川の菴

菴れ初と船をならぬすこが  
まのこま志を里あゆむ  
いよ川の袖よりさるる  
雨の音も集れり  
はくは終は母原村の庵

加賀 二水 上枝 甄可 嵐

菴れ初と梅れこよれ茶も  
谷川や平長共こも秋の音  
るゆれ音とやうり村れり  
田中畑はさるまにのしき  
こまのなすもさるる  
こまの初あやも  
おれそ何れもさるる

伊豆 全 益言 集 夏 越人 一髪 夜舟

淋<sup>濃</sup>凡<sup>濃</sup>之<sup>濃</sup>櫃<sup>濃</sup>以<sup>濃</sup>宜<sup>濃</sup>之<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>る<sup>濃</sup>床<sup>濃</sup>之<sup>濃</sup>が  
 見<sup>濃</sup>る<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>人<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>宿<sup>濃</sup>る<sup>濃</sup>れ<sup>濃</sup>時<sup>濃</sup>雨<sup>濃</sup>が  
 垂<sup>濃</sup>り<sup>濃</sup>し<sup>濃</sup>て<sup>濃</sup>凡<sup>濃</sup>を<sup>濃</sup>た<sup>濃</sup>め<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>ぶ  
 ら<sup>濃</sup>流<sup>濃</sup>や<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>る<sup>濃</sup>を<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>り<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>ぶ  
 春<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>そ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>な<sup>濃</sup>秋<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>蝶<sup>濃</sup>  
 冷<sup>濃</sup>け<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>て<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>も<sup>濃</sup>花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>  
 何<sup>濃</sup>お<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>は<sup>濃</sup>薄<sup>濃</sup>れ<sup>濃</sup>流<sup>濃</sup>れ<sup>濃</sup>れ<sup>濃</sup>

濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup> 濃<sup>濃</sup>

秋<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>も<sup>濃</sup>花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>  
 夕<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>て<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>も<sup>濃</sup>花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>  
 なが<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>て<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>も<sup>濃</sup>花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>

荷<sup>濃</sup> 集<sup>濃</sup> 弄<sup>濃</sup>

雨<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>て<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>も<sup>濃</sup>花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>

翁<sup>濃</sup>

花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>ま<sup>濃</sup>あ<sup>濃</sup>て<sup>濃</sup>こ<sup>濃</sup>ら<sup>濃</sup>も<sup>濃</sup>花<sup>濃</sup>の<sup>濃</sup>冷<sup>濃</sup>

令<sup>濃</sup>

あけのしづり

船をこぼすらるるもの

昌碧

芭蕉士の屋敷

物にさすくはるる

舟泉

之の

父母の志を承るる

翁

此の世に立寄る持世の

素流

あけのしづり

水鶏と鶴とを食ふ不周とん

馬を好む佛よなむのぞ

荷号

物にさすくはるる

まじりてはるる

大坂  
りせ

本意のちをゆるるる

支考

海をよめる

左次

常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋  
常々山崎の如く丸小橋

晴燕  
梅弘  
李久  
朱拙  
古山  
快之  
南川

誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲  
誰とていふも道の花雲

野水  
風暈  
梅弘  
青竹  
龜尾  
雲暗  
尹口

新う 諸れ ありとうす  
常ら 蜂ありて 果吉くは 喜  
地より 解くこと ぬ 軽に 柳  
雲より 雨子 蜂鳴る 他れ 一  
前命ありて 井 錯ひ ぬ  
出 娘いし 翻る 今 衣  
る 与 括し 流 居る 更む

長 虹  
曉 虎  
古 語  
仁 科 重 金  
拔 陽  
丹 水  
不 巧

初 名 也 拾 ねる ず 後 時  
黄 土 なる 後 あり 子 子 早 女 如  
何 して 事 世 信 ぬ 也 柳  
さ たり ぬ 女 子 あり 年 乳  
水 子 流 三 層 也 里 雲 雨 齊  
何 等 他 事 子 弟 出 凡 なる 也 籠  
子 乃 及 凡 事 也 以 結 也 雨

野 子  
鉄 舟  
水 石  
弛 張  
江 戸 秋 風  
畔 豆  
柳 雪

月は照る夜も寝て雲は  
 世の中も眠れぬ時衣  
 涼しき星も光りて  
 月も光りて  
 舟も  
 舟も  
 舟も  
 舟も

月も光りて  
 舟も  
 舟も  
 舟も  
 舟も  
 舟も  
 舟も  
 舟も

長沼 四凸 浮如

新所 不自 相先

不巧

磯舟

梅雀

雪暗

江戸

東推

谷水

是柳

重立

是旋

巻の首紙

昔のまゝのりのりのそくのそく苔の水  
 わくまの船船船のちうのちうの梅の花  
 何れのちのちのなげなげくくまま中中にに推推子の  
 かけかけのの家家のの潮潮干干のの虫虫のの宮宮  
 橋橋ががううれれ終終又又昔昔ををななくく危危  
 花花のの酔酔ささああすすふふ池池のの新新法法のの

独下  
 浪化  
 東推  
 素説  
 十斤  
 抱童

ちあちあのの場場はは流流れれくくああのの柳柳が  
 川川岸岸のの勝勝るるのの月月ををままのの月月  
 ささのの川川にに濁濁るるととははままのの女女梅  
 香香のの人人ののままのの朝朝のの人人のの目目は  
 昔昔ののままのの人人ののままのの朝朝のの人人のの目目は  
 ああままののままのの人人ののままのの朝朝のの人人のの目目は  
 ははままののままのの人人ののままのの朝朝のの人人のの目目は

不徹  
 沢水  
 林月  
 友の  
 岳洞  
 推之  
 其角



涼一匹の風も利言のつらさ  
そとく乃ちあま方か 月夜草が  
浪へのさゆと 啼やまらう  
川持のまゝと 秋乞の 定まらぬ  
雲のさゆと 梅の なるんが  
春物の 足や 子魚まき草が  
子月雨の 虎う 持たぬ 小童

朝雀 扱柳 机豊 不睡 海石 涼竹 屯糸

山汁をとねと 虫破すや 春の海  
一葉の 多葉ふ 粉の ころ 大工小童  
活をうと 糸と せと 蓮の 子  
三益の 徳の こと 涼の 子  
け 甚とく 一寸の 花の 春の 子  
か くの の 子 誰れ 教る 花の子  
子を 思ふ 雛子の 流る 思はぬ

栢柯 徳交 秋来 之令 跡竹 扱柳 羽重

終れそふくきのうのうきく晴月  
 おひらうく鳥羽しきくをさきなり  
 夕きのの降のうきくをさきの月  
 つくさくは秋のうきくをさきの  
 山梅のうきくをさきの一字とけく  
 梅のうきくをさきの竹のうきく  
 新清のうきくをさきの梅のうきく

可吟  
 松寸  
 荀巷  
 糸芳  
 おひ  
 素鏡  
 吾仲

行ひきくちくくおぐくさのみが  
 一ひの光のうきくをさきの雲の那  
 おりぬ鼻書とんくをさきの  
 新七かくさのうきくをさきの  
 風さくくくくくくくくくく  
 二由たしおのうきくをさきの神送  
 首のうきくをさきの桔梗が

朱  
 推之  
 は道  
 千來  
 全  
 竹お  
 吹る

石月やち世成しわま所家のを  
 山畑やうるまし河れさくち根  
 ちりりの三重く編のさしは  
 しまるるあく聖ののれは  
 ちりゆきく流るのちと耳原  
 あり海成さあり地をくさ月  
 菊月をさ流るまのしほりか

且栖  
 野産  
 色池  
 小也  
 推之  
 井為  
 如瓶

冬枯し水涯遠し橋の上  
 あり守か内小池し一世帯  
 朝のまし河よりまらぬ一帯を  
 傾城の長御と帝のまらぬ  
 物言ひはしつあり茶のゆき  
 野原の御ま言てもはよか  
 分別の鑑をある大徳が

沃水  
 橋月  
 水上  
 巴都  
 斗ト  
 推之  
 全

ヲクナリヤ念々〜つゝ〜  
 程も好く素肌足すや秋の  
 奏キ好くもそ鼻す大蛇  
 かしり子れ中病〜  
 仁の 斷がきち神の  
 き里海下凡き〜  
 小まが三月妻の種を〜  
 東推 吞小 魚丸 正猪 独ト 誰重 推之

雞乃あまに夫婿の〜  
 夕な魚〜  
 其の中〜  
 鳩吹よ〜  
 ゆく〜  
 乙月の午穂〜  
 け〜  
 夕道 勇和 尊九 五内 存華 夕道 持希

五月のしづかき鳥のさつるさ  
小島ささるるさ池のかさり物  
月鏡

春之部 中國集 東就馬撰

ささるるさささ今秋のさ  
隨時

ささるるさささ今秋のさ  
了童

背さささささ今秋のさ  
愚計

奥さささ物見ささささ  
月童

世人急記鼓ささささ  
薰松

かささささささ京のさ  
岩松

腰帯ささささささ  
蘭菊

さささささ大黒さささ  
風光

人跡さささ上戸さ御慶礼  
相髪

ささささ大星さ乃大嫌  
中負

猫ささささささ眼は合  
寧孝

信列仁科

木曾探川

飛列高山

木曾善筆

小牧原新田

信列仁科

知多西太高

摺粉石八様修とま家なりのりあらしる 信列仁科 一煙

ヤ柳の下のをの種の落のたる 藪 洞石

古葉のさらくる 鑄の定まるるすの落の 越後系奥川 未英

初の年の々々年の々々花の同の 中々

夜の中の々々三月の中の々々味の嚼の雜の葉の 札雪

高のくく下のくくあらまらしる花のため可し 櫻木

白梅の素の人のさらるる白のひの枝の 了重

白梅の障の子の引の化の糖の分の一の宮の 流水

傾城の素の足の々々々々々々 昌

戸の代のわらくく々々損の竹の素ののも 古調

本の母の々々音ののの二の味ののの々々 以水

梅の鱉の々々乃の々々 和風

梅の河の家の々々との是の々々川の 向の 学仙

詠の二の々々々々々々 如柳

信列仁科

洞石

越後系奥川

中々

札雪

櫻木

了重

昌

古調

以水

和風

学仙

如柳

系奥川

三列 鳳来寺

鼻ははく雲々梅は白の哉  
己次  
心も山をう鎌う波は雲霧  
敏行

少年 花もいさ

さくさくさくさくさくさく  
風光  
小刀も舞う見まうしはのう  
風子  
紅香は色をうたう香い糸  
美夫

若いさくさくさくさくさくさく 智多栗高  
舟鷺

あはれさくさくさくさくさくさく  
洞石

今朝をさくさくさくさくさくさく  
林松

人の身はさくさくさくさくさくさく  
唐扇

ふゆさくさくさくさくさくさくさく  
雪丸

柳さくさくさくさくさくさくさく  
友好

破し傘さくさくさくさくさくさく 小牧原新田  
林之岬

池水の暮る柳入木の 雨  
未央  
地柳茂キテ所ある波の音  
快子  
己秋の地とよき家柳が  
暮岫  
川城のしるしをたぬれまが  
青松

長野、眺望

馬／＼を引く星志の鹿  
昔身  
果志のぬらりもの仁心  
信列仁科  
柳雨

道者北山日記

明野、暮る、星志動きや秋意  
学山  
後、孤茂をんかすみ、ぬ  
器衆  
山二重赤越茂り、紺子、其  
昔耳  
紺子、鳴く、雨、朝日の旅程、其  
存行  
まゝ、弱き心、ゆるり、繩す、し  
信列仁科  
指羊、よ、入、今、又、を、存、慈、う、那、  
即休  
家重



鉄炮の玉より矢より花を先哉  
 松桂  
 並々塔千の流のほろこるま  
 今  
 本多塚の菊千子にむす意  
 淵泉  
 親と秘し池の白くや瞳月  
 菊菊  
 河揚と花の白くや瞳月  
 菊菊  
 扱物や年々同くは瞳月  
 文好  
 玉屑と茶屋つくと瞳月  
 卯醒

隣りもか月と存世の三交並  
 即休  
 膝這のむく小まに膝  
 茸  
 帽子と花白くは年の瞳月  
知多栗高  
 龍晨  
 川舟の光よりきくは胡蝶か  
毛列高  
 夕道  
 花を吸むよとくは胡蝶か  
 友好

二二八二

不辨々甘らゝのり、巴雀

枕咲く泣きの多き、伏せの柳字仙

離れ家娘の恋之枕れ毛列高山梅

生路之ぬけのつれづれ、の花江鶴

いし西ラも来せぬそら母の心苦年

葦原を小町もあまのこめれ修琴

物あつと程もまぬれ離れ誠後系兩岫

沖中へ舟をかり就わる塩干も母心

二三里も小神のそと塩干法列郡福都

名の志せぬ見を塩干の七葉大曾野尾之云

あえ乃らばそは強す塩干法列郡慰琴

茶屋とふんく大まのよする潮行唯人

花の山や旅の丈御を待つ信列仁科く

まゝさぬ花のさくらく友好

おもしろい所も通る花見戎  
おれはよくあむむい花のまふか  
水戸をくすくすくもれえぬ  
席マキのきくぬぬと記也か  
東宮  
古調  
松桂

山寺の春夕

暁鐘と追々くぬく花見戎  
花見戎甘くぬく  
左  
各

おれも鹿はまけくたの雨  
水戸屋敷の日和別くたの雪  
飛の鳥もまの加減くたの雪  
おれもくたの雪をぬく  
かえりてぬくむい花の雪  
花の雪もぬくむい花の雪  
い雨の雪もぬくむい花の雪  
一梅  
信列仁  
四雪  
未笑  
卯醒  
巴薩  
琴月  
曉舟

梅が春——蘭も移——三味れ後好昌  
独り暮る山寺うらふさめ——  
机雲

才のふよ故何——

夕の——ら物や移——ひさめ——  
閑脚ワキのき——すめす梅が  
暮風  
管入の娘の綺羅や——山さくら——  
秀陽  
荷ひきよる——の——叫の梅が  
琴月

第月成まを教するさめ——が  
己外  
教河を——ら——一さくら——  
郡上  
酔夕  
まゆめを賞らるる新 酒屋  
母田  
毛纏マユの牽ぬ——  
琴月  
雨  
まよ小尻くわく雲雀の落——  
琴月  
月空  
も言入——ま——ま蓮の蓮あ——  
存行  
八棟成何篇あ——  
梅れ——  
東菴

土筆よふ折はやくの 一出 直重

苺子蹴れ立傘狩りや土筆 字風

去年に雲宵の花つらむ草 机雲

ひよのゆきくのうらつたすまれ 幸昭

隙指く怪い茶摘や玉婦神 信列仁科 笑實

まゆや幕一とまらぬ物さし 珠列神戸 安睡

風風之構よさぬ。いづのふり 修琴

咲みやく地しもあふもまじさう 弁醒

菱之部

ちよいの下女道々更衣 修琴

駕を然らむ板玉神の更衣 友好

接の雨跡や乞食の文 和風

男の舟の列津さくらも之 甘 和風

うらも好むさくらも白替 修琴

名と云く根河並葉河の牡丹の  
 水幅浅押をけえり杜若  
 よい江のあつゆや杜若  
 天河流れりやけりや  
 かとよあゆみのをりや  
 基の劫の一よにけりや杜鵑  
 子規ぞやけりや録  
 江鷓 任治 若耳 松桂 束抱 友好 安田

六士と包とけりや郭公  
 志とちひくとけりや  
 河の代の原あ形をかん  
 大踏をけりや  
 梅道れきと角や  
 惟あやと教授  
 憲法の園やけりや  
 学山 遊泉 源慶 慶和 若耳 湊春 即休

白壁の沖のうららかなる水風  
吹くもよりのうららかなる外  
幸の松のうららかなる巴  
白雲のうららかなる普

春の風

一色にうつる雪のうららかなる  
春のうららかなる川石

楊屋の伽羅木の枝や州  
我が方成きうららかなる家重  
草薙うららかなる悦笑  
船燈の虹のうららかなる楊  
熊のく子の寝るうららかなるト水  
子しやうの体はうららかなる松桂  
ちたし細いうららかなる未英

五反り多く白糍シラワくる火事ぬれ 巴外

百姓の糍の干らりや大り信列田信列 伊守

まきムギちりくシあきあきシ 乱笑

人シせし同一種シ黒穂シ麦 外雀

替シ只四日市シ濱島シのシ際シ 即奥

田シと畑シと昔シの守シ以シ穢シ清シ水 東響

流シ水 流氷

ぬけシ渚シの全体シとする青日シが 唯人

ありシを五シ雲シのシちシをシ柳シ花 江都

新シ色シをシくシくシ也シずシる青月シ嵐 信列

純シ好シれシ邪シ也シをシんシく 園意

茶シ州シと金シ華シとシくシすシる竹シ 友好

雨シ庭シくシちシをシちシりシくシる白シ下シ 信列

雀シ鳴シ木シの下シ園シれシまシくシ 南堂



小餅のかりう中々密嫌花  
 春川の空を抱き入 ホッロ 瘧  
 玉の海を帯れ帯りのも 鉦  
 若のう矢刻の橋や又さるを  
 尾寺れ籠探り前 一 節のた  
 那須氏扇の的を散ふ柏  
 雉子つゝ海守柏を古きふ

慰琴 淵泉 文之 松桂 字仙 龍晨 字意

白雨よぐさくよ牛かゝる麻ふさ  
 白雨も草かゝる鞭うらむさき  
 夕立ちや夢助く拵る裏の所

如鼠 机雲 凡子

旅行

夕立ちく地獄く穀の生てす  
 浮世く川わらきさ 暮の月  
 陈旆の鎬控く以清水く如

了重 宇林 林杏

清み持て踏く留り  
 杖もくつりたる積り  
 津まへ頭を踏出す暑くれ  
 夜湯を初とかせりあはれ  
 柳の葉をいふやえり  
 河骨の節かみり  
 ちりまるとすし  
 唯人 松桂 榎木 卯醒 文之 南市 学尼

舟の波柱をみるし涼  
 船の舵をきねれ涼の空涼  
 懸懸を不名よ川中夕涼  
 帆繩たゆむ涼  
 歴くもみ水茶屋なる涼  
 並まへ浮舟の帆細吹  
 月道いと涼丸涼心燕  
 舟す 兩岫 月堂 愚計 友好 末英 松桂

故くゆりくうの如くしり録に

出松

秋之部

一音中ん鼓之鞆よ一葉ふくし

松桂

其のよめの肝と接する一葉ふく

修琴

海苔をよのよとせよ一葉ふく

好言

凡あよ海苔をよのよ一葉ふく

直定

踏ふる桐中一葉から雀うれ

一建

一葉に桐をよのよとせよ

未英

轉鈴の一本をよのよとせよ

松桂

轉鈴を連理くわく也也

凡子

あはれ中日よのよとせよ

蘭菊

将一葉をよのよとせよ

安重

車子に訪きく挨拶

九百市場

牀凡よのよとせよ

北雪

曜づもく 角がな 夕夜 東鷲

北雪言とまきよきまのよ

御出とて夢又ていなる 萩の声 北鎮

ま〜〜まきまの 秋の音 東鷲

七夕の終り 雨の 悟気 巴雀

どこぞとて 滝の音 銀河 峯雪

所々の鬼灯がしるし  
ひかりがさする母のけしき

鬼灯は練くく 玉糸と 巴雀

ま〜〜と 出白は多く 玉糸里 松桂

ゆふあつ月と 確れおきけ 友好

かきま〜〜と せ〜〜と 五夕

編みは扇と 角がな 巴雀

日之記の 律義は身も 負持 巴雀

朝衣おきく 浅きく 子は 吳雲

知多西大高

白雲あはれと云すくもろと書き  
 鬼灯あはれと云のあはれと云す  
 今朝あはれと云のあはれと云す  
 山あはれと云のあはれと云す  
 袖あはれと云のあはれと云す  
 丁あはれと云のあはれと云す  
 いあはれと云のあはれと云す

直重  
 巳次  
 風仙  
 直重  
 智耳  
 雲  
 巳次

病後中酔

うあはれと云のあはれと云す  
 袖あはれと云のあはれと云す  
 殿あはれと云のあはれと云す  
 初あはれと云のあはれと云す  
 ちあはれと云のあはれと云す  
 抱あはれと云のあはれと云す

今  
 毛  
 墓  
 松桂  
 左  
 江鶴

養高行軒の共平栄の海一の  
紅裏の裾了重出蘭菊毒の  
餅已の糖已の冷已の茶已  
常常の氣常の照常接常の常今日常月常  
常常の氣常の照常接常の常今日常月常

益應馬の餅應馬の應馬月應馬の應馬  
益應馬の餅應馬の應馬月應馬の應馬

巨靈堂

石巴雀の月巴雀の杜巴雀の巴雀孫巴雀治巴雀の巴雀書巴雀  
鳴東鷲の必東鷲定東鷲之東鷲志東鷲の東鷲心東鷲の東鷲鳥東鷲  
病東鷲の東鷲心東鷲の東鷲折東鷲の東鷲雨東鷲催東鷲の東鷲心東鷲  
玉東地の東地心東地の東地折東地の東地雨東地催東地の東地心東地

樽拍子おるや形立今日月  
連節れ志こらし月也般  
隣り舟お舟お月又お

星落れきりし飲却て  
写ぬ小海は辭と續

匏益ウツムセとまこころくく月  
琴月

舟橋とあて舟七早  
と成りしと月の残りく

籬千ア堂付らん東のり  
今

一舟とあて舟七早  
籬千ア堂付らん東のり  
舟橋とあて舟七早  
と成りしと月の残りく

偏浅舟やらん舟橋のり月  
あの生れ根よ葎あり暮れ月  
三月の蓮きしと花の光

東就  
胡叟  
暮山

西へゆく西へゆく三つの月  
獨言りゆく灯を消し去る  
武義野へ虫まじり所  
賑へゆくゆくゆくゆくゆく  
合点く居ては海ぬきゆく

寒實

鳳池軒

敏行

蘭菊

昔年

雨指残訪

乃ちち哉神のゆくゆくゆく

友好

ゆきゆくゆくゆくゆくゆく  
まじりゆくゆくゆくゆくゆく  
云々ゆくゆくゆくゆくゆく  
月よ昔をゆくゆくゆくゆく  
入桐の鼻こをゆくゆくゆく  
白菊の無限のゆくゆくゆく  
月一目菊哉一月のゆくゆく

全

古調

外産

全

昔年

未英

正重



白菊の世は山つらう 鶴頭花

藪蔭

我あは余とてまき出る紅茶ふ

修琴

所ぬりて座を月に行きとて

淵泉

よふ年なほしとんまをゆめ

松桂

のりてまゝなほして清きつら

北柳吹

よふ年なほしとんまをゆめ

左

家出建す人とはあて時雨

敏行

冬之部

猪中の尾を曲してはたしはた

江鷗

かゝるはく同魔の帳の身は

巴雀

希髪入りの花言高野

木鳥

風を思ひ遊ぐはたは脚

蒼鷹

ゆふのまはる若菜はあそび月

蘭菊

さうらゝとて声らしはたは月

巴林

波中のまはるはたはちりる

修琴

空し声たの肩を帰る川

友好

水もあつ函と函と保浪

重口

猿はよととととととと

浮光

凡そ馬もいふく空もいふ

巴城

一季もあつたてとととと

兩岫

氷身柳を青姫のいふ

筒角

十五の行義はあつた

白雪

上列藤岡

三列新城

挑灯よ別れをきく

巴城

薄暮をきく

机雲

空しととととととと

遊水

白雲と目のとととと

蘭菊

かごととととととと

松桂

雞鳴はあつた

卯醒

足がとととととと

中貞

後年より下中を以て糖のほかに  
 其季作の其持料てのりて  
 憎らる代りは所々を以て  
 取玉の種ありて年々を以て  
 好まざるを以て其末を以て  
 分別と捧げ振ら師を以て  
 初雪よと月日ひひと  
 廿  
 芦水 十貫 昌 鳳子 昔年 文之 江川

軒侍花 露河撰

唐湯の松を以て入河を以て  
 難くはよとて難うの涼を以て  
 以てしるらましのらるる  
 火煙のすまのらるる  
 蝶あつてを以て其末を以て  
 其末のすまのらるる  
 江鶴 還珠 草丸 怒凡 隆凡 季吟老人  
 廿

古歌口へ別 ちまう 孫のうや 江 許六

尾崎文通

芭蕉翁

海士に逢ふ山海光しきまゝのうら  
ぬの口をさそひてあせしん今季の  
車とくけく 越えたる城宮清  
苗代に柿のころもあそきて  
懐所のよもいへん初と暮とく  
東推 独卜 楚山 立枝

是字あると 破るあはれ名時馬 一尻

白浪をえる 芝の指れわきす 峯盡

舟の縁をさす 舟の縁をさす 水也

舟の縁をさす 舟の縁をさす 亀洞

舟の縁をさす 舟の縁をさす 斗旭

舟の縁をさす 舟の縁をさす 陸柳

舟の縁をさす 舟の縁をさす 林鏡

河のほとりへ飛べ河けを雀  
 時らるる梅は梅入の雀  
 軒下より家より雀をまらぬ  
 別し方そし遊けり村をたれ  
 半し半の就けありはたれ  
 卯の花は白まぬもあつら  
 かきくらしきしるの葉は子神宮  
 同玉ふ色

免三  
 剛和  
 二乐  
 竹力  
 懸輕  
 天火  
 羽皇

乙麻のそそりし方の月  
 ぬきをたれしあふしはたれ  
 出せいのけりたれゆきし  
 卯の山より下月よはるる際り鳥  
 君も若むらぬもそはれま  
 出し目よはるるのこころのた  
 新の庭よりそそりしや春は雨

正勝  
 火石  
 普在  
 口精  
 鳥江  
 沢鳥  
 玉推

草花をくわしきからくゆしき  
 降まらんこ書物れふれふりし  
 秋の鳥の陰をて晴風をうたひ  
 夕顔やちくの婦を為化し花  
 物ねさゆをあつしものそし  
 初ねこふふふふふふふふふ  
 少年 自信 春山 三行

少年書

花風をくわしきからくゆしき  
 少年 自信 春山 三行

何年や海田をるは遊落し  
 年とくく仍伴の師をくま  
 昔年をくわしきからくゆしき  
 煙掃や空をほよよ玉玉葉  
 何月かの高みは山  
 下麻生  
 茂土れ空をくわしきからくゆしき  
 少年 自信 春山 三行

風をさしけし霧をさしぬれ敷  
 今  
 せぬあつたよ神人所  
 左  
 なるまのよふいとけをさる  
 松寸  
 行多すすたれたて候る  
 三行  
 余のまよとほまよぬるまの  
 蜀瓦  
 つきくや川のほつた敷ね  
 今  
 敷りるまをうつりても雪  
 老白

柳教申しよしるるをぬれ  
 今  
 富士のよふまよとつ月望  
 栲川  
 かまひの勝よまよとまの  
 如流  
 ちと候世とけをさる候る  
 蜀瓦  
 蜀瓦

あけ辞書

去来やまに我れは松さる  
 蜀瓦

ふりかへりては







